

今東光資料館にて……まずは屏風をご覧ください

文学館の熱さをたのしむ

KEYワード

第
76
回

文学の力は大きい。昨年の三月号で、織田作之助賞に関連して、優れた作家たちを輩出している大都市であるのに、大阪市内に公立の本格的文学館がないことを嘆き、八月号で藤本義一さん(1933～2012)をとりあげて、地元大阪の文学を大事にするべきでは、と気炎をあげていたら、奇しき因縁か、今東光資料館(八尾市本町2 電話072-943-3810)で、企画展「続・東光と交流したひと～今東光と藤本義一～」が開催されている(3月12日まで、月曜休・ただし祝日開館)。以前紹介した藤本さんの記念館「藤本義一の書齋-Giichi Gallery-」(芦屋市奥池町)との共催企画である。

今東光(1898-1977)は、谷崎潤一郎を生涯の師と仰ぎ、戦前は新感覚派の作家として活躍するが、既成の文壇に反発して天台宗の僧侶となる。昭和26(1951)年、天台宗総本山延暦寺座主の直命で天台院の特命住職となったことで、八尾に移り住み、「河内はバチカンのようなところ」「歴史の宝庫」と驚嘆した。その驚きを原動力に作家として復活、昭和31(1956)年、『お吟さま』で第36回直木賞を受賞し、「河内風土記」「こつまなんきん」「悪名」など、一連の「河内もの」を発表した。

しゃべり方がなんともガラッパチで、面白い和尚であったことを覚えているが、そんなうわべとは異なる学僧であり、中尊寺貫主にもなって国宝の金色堂の昭和大修理を実現させた。

参議院議員になったときは、学生時代からの親友であった川端康成が選挙事務長をつとめている。勝新太郎、田宮二郎主演の映画「悪名」のシリーズは、よく見たなあ。第9作の「悪名太鼓」は藤本さんの脚本という。

さて、この展覧会で目玉ともいえるべき貴重な資料が、藤本さんが「鬼の詩」で直木賞を受賞したとき、第三回「野良犬会」で受賞を祝い、みんなで寄せ書きをした屏風である。「野良犬会」は、「鎖に繋がれていない犬、首輪のない犬たちの会」を標榜し、特定の出版社に縛られないで執筆する作家の集まりで、昭和48(1973)年に結成された。この屏風に書かれたメンバーは、会長・今東光、副会長・柴田錬三郎、事務長が梶山季之、会員に、井上ひさし、黒岩重吾、田中小実昌、長部日出雄、戸川昌子、野坂昭如、山口瞳、藤本義一、吉行淳之介ら、それぞれが言葉を贈っている。

藤本さんの直木賞受賞は結成の翌年にあたる。屏風には「祝藤本義一君」と今東光が大書して、その筆は力強く、ひとくせもふたくせもある他のメンバーもなにやら一言ずつ書いている。

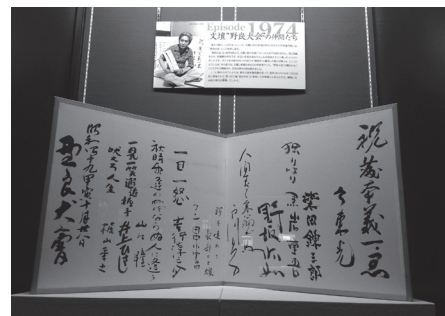
藤本さんが東光に会ったのは学生時代のことだ

という。将来の進路は決まっていなかったが、藤本さんは、大阪府立大学で農業経済学を専攻し、河内木綿研究の第一人者である武部善人教授について、木綿や河内ぶどうの調査に河内を廻っていた。学生は藤本さんただ一人。その調査のおり、天台院に立ち寄り、東光和尚とまみえ、気さくな和尚と何時間も話し込んだらしい。

「中外日報」のシナリオ懸賞で藤本さんが「佳作」となり賞金をもらいに行ったときは、後の同社の社長でもあった今和尚が、「なにやらムニャムニャと賞状の文面を読み、ワハッハとなにが一体おかしいのやら笑われて」、賞金を手渡したという。二人は親子のような、歳の近い親友同士のよう、なんとも面白い交流をつづけた。

また、学生時代の調査から河内の女性が乳母として大阪で働いていたことを知る藤本さんは、「河内の乳母の話はまだ書かないのか」と、いつも和尚からハッパをかけられた。

今東光資料館は八尾市立図書館内に設けられ、展示もコンパクトで規模も大きくはないが、この館が文化発信に果たす役割は大きい。藤本さんの残した名言もパネルにされ、大阪への思いの深さがあらためて偲ばれる。展覧会を見て気持ちがサッパリした。やはり文学館は熱いのである。



今東光資料館
(上)展示風景 (下)「野良犬会」の屏風

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像―」(創元社)など。